



第 93 回(平成 26 年 1 月 8 日)定例会の講演要旨

「手稲の砂丘に暮らした人々」について

元札幌市埋蔵文化財センター長 加藤邦雄氏



昭和 29 年に発掘した手稲遺跡は、後期縄文文化を研究する上で、標識(基準)となる土器であり、手稲式土器と呼んでいる。東日本の縄文文化、特に後半期の縄文文化を研究する上で、手稲式土器は避けて通れないものである。そこに冠した、「手稲」の名は考古学の世界では非常に有名な地名となっている(考古学の年代を決めるときには、基準の土器を決めて、それより新しいか、古いかというかたちで組み立てていくからである)。

手稲遺跡で発見された土器は、東日本全域に分布しているところの関東の加曾利 B と同じ土器である。これがなぜ、手稲の方に来たのかというと、5000 年～4000 年前は中部山岳地帯(長野県)に縄文文化が栄えた。

しかし、この年代の後期に、気候が寒くなった。縄文人の 60～70%の主食は植物である。しかし、寒くなると植物相が変わってくる。そのため植物を主食にしていた人々にとっては生きにくくなる。そこで、海洋食糧を主食としていたところの関東地方の人々の勢力が強くなり、それが全国的に拡散していったのである。当時の関東地方の人々は、陸路がないので、丸木舟を使って海を渡った(丸木舟は 7000 年以上前の縄文時代のものが出土されている)。

縄文時代は、津軽海峡や山、川は文化の広がりには影響を与えない。それは、縄文人の 70%程が植物性の食糧であるから、植物相が同じであれば、全く同じ様相を呈している。津軽海峡を挟んで渡島半島と盛岡あたりまで、土器の形・文様はほとんど同じであり、この地域は同じ文化圏といって良いであろう。

紅葉山砂丘はどうして出来たか? 考えてみよう。

6000 年位前、気温が 2℃ほど上がった。そのために、北極や南極の氷が解けて、海面が 3～4 メートル位上がった。それによって、札幌・江別の方まで海が入り込んでくる。その後、気温が前の温度に戻ると海岸線は後退して行く、その過程でできたのが紅葉山砂丘である。この近辺でクジラの骨や、貝殻も出ることから、ここが海面下であったことが推測できる。古くても 5500 年位前に砂丘上に人が住み始めたと考えられ、その後は、間断なく住み着くようになった。ここは、食糧の獲得しやすい場所でありここを中心に集落を作っていたのであろう。しかし、この砂丘から離れるにしたがって遺跡は少なくなっている。特に、手稲遺跡より以遠には際立ったものがない。

石狩支庁の方には、豊富な発展したものが見られる。石狩町の石狩高校の近くにある公園で発掘されたものの中には、柩の中の勾玉など、豊富な副葬品を持ったお墓も発掘されているが、残念ながら札幌ではそれに匹敵するような遺跡は出ていない。したがって目新しいものが少ない札幌の遺跡のなかで、手稲遺跡は優れた貴重な遺跡であった。

北海道を見てみると、北海道は南からだけではな【裏へ】

次回の予定

次回(3月12日)は、木村博氏の「45周年楽しく歩いて健康づくり」の研究発表を予定しております。

後半は、「平成25年度を振り返って」皆さんで意見交換を行います。

会場は、視聴覚室です。

「武道」について

金山 宗本和博氏



武道あるいは武士道を考えるに当たって、次の二つは時宜を得た話題であった。

・平成24年度から、「武道」が中学1・2年生の保健体育で必修科目となったこと。

・平成25年1月に日本女子柔道の体罰問題が話題になったこと。

さて、柔道・剣道などの武道が、日本よりも海外において、その愛好家が増えているのが実態である。アレキサンダー・ベネット氏(日本の武道に深い関心を持ち、実体験を通して、偏見のない本来的な理解を示し、その武道の思想を世界に広めるべく活動している)は、「外国へ行ってみると、どんな小さな町にも、必ず道場がある」と言っている。愛好者の人口は、空手が一番多い。次が柔道、剣道、合気道、柔術、相撲、弓道、少林寺拳法、なぎなた、古武道と続き、世界での愛好者は何億人にもなるだろうと

言っている。特に、フランスでの柔道連盟への登録者は58万人いる。それに対して日本では、17万人である。

柔道の練習中の怪我は日本では少なくないが、フランスではほとんどない。これは指導の在り方に問題があるのではなかろうか。例えば、海外での柔道の指導者は、日本人よりも伝統的な礼儀作法を身に付けている。また、道場の佇まいにも配慮があり、その精神を重んじていることがうかがわれる。道場の正面には、その国の国旗と日本の日の丸を掲げられ、柔道であれば嘉納治五郎の写真、弓道、剣道においてもその象徴となるものが飾られているのも、そのあらわれであろう。

講道館創設者の嘉納治五郎は、「柔道は、格闘において自分の身を守ることから始まっている。したがって、競技中は死にもの狂で徹底的に闘うことである。しかし、終わった後は禍根を残さないように相手への思いやりの気持ちをもって礼儀でけじめをつけるというのが武道の在り方である」と説いている。昨年話題になった柔道問題(柔道全日本女子代表監督として女子柔道の国際試合強化選手を指導していた警視庁所属の園田隆二氏が、強化訓練中における暴力行為やパワーハラスメントで訴えられた)について、IJFの会長は、「この指導の在り方は、嘉納治五郎が創設した柔道の精神・哲学とまったく相容れないものである」と言っている。

上述のベネット氏は、武道の本質は、「残心」にあると述べている。例えば剣道であれば、討ったあと、相手の反撃に備える心の構えである。その残心がその人の生き方に繋がっていくというのである。鍛錬で得たその成果を社会に還元するというのが、武道を学ぶことの本質であると言っている。この精神が、外国人をして武道に惹きつける誘因となっているのではなかろうか。

武道・武士道について著されたものが多くある。なかでも新渡戸稲造の「武士道」は著名である。李登輝の「武士道解題」も参考になる。内村鑑三は代表的な日本人として二宮金次郎、日蓮、上杉鷹山、西郷隆盛、中江藤樹の五人を挙げているが、これらの中に武士道の精神が一貫してながれている。

以上、世界における「武道」への関心状況を眺めながら、「武道とは何か」ということについて考えてみたが、今後の課題として、手稲における武道の取り組みの実態を考察したいと考えている。 [文責:小田真二]

..... ◆ ◇ ◆ ◇..... ◆

【表より】く、北からの文化の影響も受けている。そもそも24,000年前に最初に北海道に登場した人間は、シベリア大陸から歩いて来たものである。陸続きのときに、マンモスなどの食糧を追いかけたのである。

さて、日本人はどのような構成になっているのであろうか？

元々いた縄文人の中に渡来系弥生人が入り込み、現在の日本人が形づくられていった。渡来は、平安時代まで続いた。当時朝鮮半島は政治的に安定していなかったため、ポート・ピープルとして来た人が多かったであろう。それらの人々を関東地方に入植せたりして、和人が形成されていく。その過程で、北海道と南九州・沖縄に残された人たちが北海道のアイヌの人たちであり南の沖縄の人たちである(これが両者が酷似している所以であるという)。 [文責:小田真二]